

# 山梨の温泉郷

いしえ  
古から受け継がれてきた、  
そのゆかしき風情。

こんこんと湧きいづる源泉、

それは躍動する自然が与えてくれる恵み。

世界的にもまれな地質構造を有する山梨ならではの

多様な泉質の温泉は、いつもその時代を生きる人々と共にあった。

古から守られ、受け継がれてきた温泉郷、

そのゆかしき風情を訪ねて。



葛飾北斎《勝景奇覧 甲州湯村》江戸時代(東京国立博物館蔵)

## 湯けむりの向こうに 悠久の歴史あり。

日蓮聖人の時代には、湯治というスタイルが確立されていた

山梨は、4つのプレートが入り組む複雑な地質構造を有することから、多様な泉質の温泉に恵まれています。大きな温泉郷がないため、温泉県というイメージはあまりないのですが、実は山梨は日本でも有数の温泉の宝庫であり、大変古い歴史を有しています。温泉は人々の病や傷を癒やしたり、文化を育むサロンのような憩いの場でもあったりと、いつの世も人々の営みと共にありました。1300年を超える古い時代の伝説も語り継がれています。その中で正式な文献として残っているのが、建治4(1278)年に書かれた日蓮聖人の書状です。当時、身延山久遠寺を開山した日蓮聖人が蒙古襲来を予言したという名声を聞いて、一度会ってみたいと思っただ人々が久遠寺を訪れたそうです。ところがよく聞いてみると、下部温泉<sup>しもべ</sup>に来たついでに興味本位で会いに来たということが分かり、多くの人々を追い返したという内容のもので、この文献から日蓮聖人の時代には下部温泉はかなり有名であり、湯治というスタイルで温泉を訪れる人がすでにいたことが裏付けられています。



## 武田家の御用温泉から 庶民の湯治場となった「湯村温泉」

戦国時代になると武田信玄や将兵たちが温泉で傷を癒やし、療養したとされていることから、武田家の領国内にあったいくつもの温泉が、後に「信玄の隠し湯」と呼ばれるようになり、また、『甲陽軍鑑』では、天文17(1548)年、信濃塩尻峠(長野県)における合戦で負傷した武田信玄が、しまの湯(現在の湯村温泉)で湯治したと伝えられています。また川浦温泉には、永禄4(1561)年に武田信玄が、そこを管理していた恵林寺に宛てて、温泉施設の修繕のためのお金を集めることを許可したことが分かる資料が残っています。このようなエピソードが信玄の隠し湯伝説につながっていったと考えられています。

湯村温泉の歴史は古く、その起源についてはさまざまな伝承がありますが、記録としては16世紀前半ごろから現れ始めます。武田家は湯村に「御湯座敷」と称する施設を持っていたと記された古文書もあり、御用温泉的な役割を果たしていたと考えられています。京の公家なども利用していたとされ、湯治中には、武田氏の居館であった躑躅が崎館(現在の武田神社)で歌会が催されることもあるなど、湯村温泉は文化サロンのような存在でもあったようです。

武田家滅亡後も、歴代領主たちは湯村温泉の整備・保護に努め、時には幕閣の中核にある



昭和初期の湯村温泉(『写真集 山梨百年』より)(左) 昭和30年ごろの下部温泉(若林賢明氏 撮影)(右)

## 江戸時代における甲斐国内の主な温泉

温泉名	所在	起源・由緒など	効能
湯村	甲府市湯村	弘法大師などが発見、信玄・勝頼が入湯	瘡毒(そうどく)・皮膚(ひぜん)
黒平	甲府市御岳町	近世初期に発見、金桜神社が経営	冷え
御座石	斐崎市山野町	近世後期に整備、くみ湯専用	疝癪(せんしゃく)・火傷
湯島	早川町湯島	8~9世紀に発見、徳川家康が入湯	留飲・腹痛
下部	身延町下部	836年、熊野の神が出現して湧出、家康が入湯	打ち身・切り傷・でもの
川浦	山梨市三富川浦	1193年、源頼朝の巻狩がきっかけで発見	のぼせ・眼病・諸病
塩山	甲州市塩山上於曾	1380年、向嶽寺開山の僧・抜隊得勝が発見	冷え・痔疾(しつ)・不妊



日蓮聖人立像(身延山奥之院)

寺社奉行も湯治に訪れました。ところが、享保9（1724）年に幕府直轄領となったことで領主不在となり、温泉の管理・運営は地元の人々の手に委ねられることになりました。庶民が運営・利用する湯治場となった湯村温泉は、城下近郊であったことや、平場のため季節を問わず利用できたことなどから、甲斐国随一の集客を誇りました。敷地内には牛馬専用の「野湯」と呼ばれる温泉もあり、農耕や運送に使っていた牛馬も入っていたそうで、当時、牛馬をととも大切にしていたことがうかがえます。

### 温泉はいつも 人々の近くにある憩いの場

山梨の温泉は冷泉が多く、盆地の暑い夏をしのぐのに適していました。現在は営業していませんが、かつて金峰山参詣客や甲府の人々に滞在型の温泉として親しまれた黒平温泉がありました。江戸時代の町人で旅籠屋を営む傍ら俳人としても知られていた鈴木調之の日記には、甲府の商家の旦那衆が商売が暇になる時期を見計らって、仲間と湯治と称して黒平温泉に滞在し、大宴会を繰り返したなどと記されています。旦那衆は7日間くらいを療治目的ではなく日常からの開放感に浸るための楽しみとして過ごし、家に帰ると今度は女性たちが、向嶽寺門前に湧出し、冷えや不妊などに効くと知られていた塩山温泉に湯治に向かったといわれています。



昭和初期の塩山温泉（『写真集 山梨百年』より）



並山日記（山梨県立博物館蔵）江戸時代の塩山温泉が描かれている

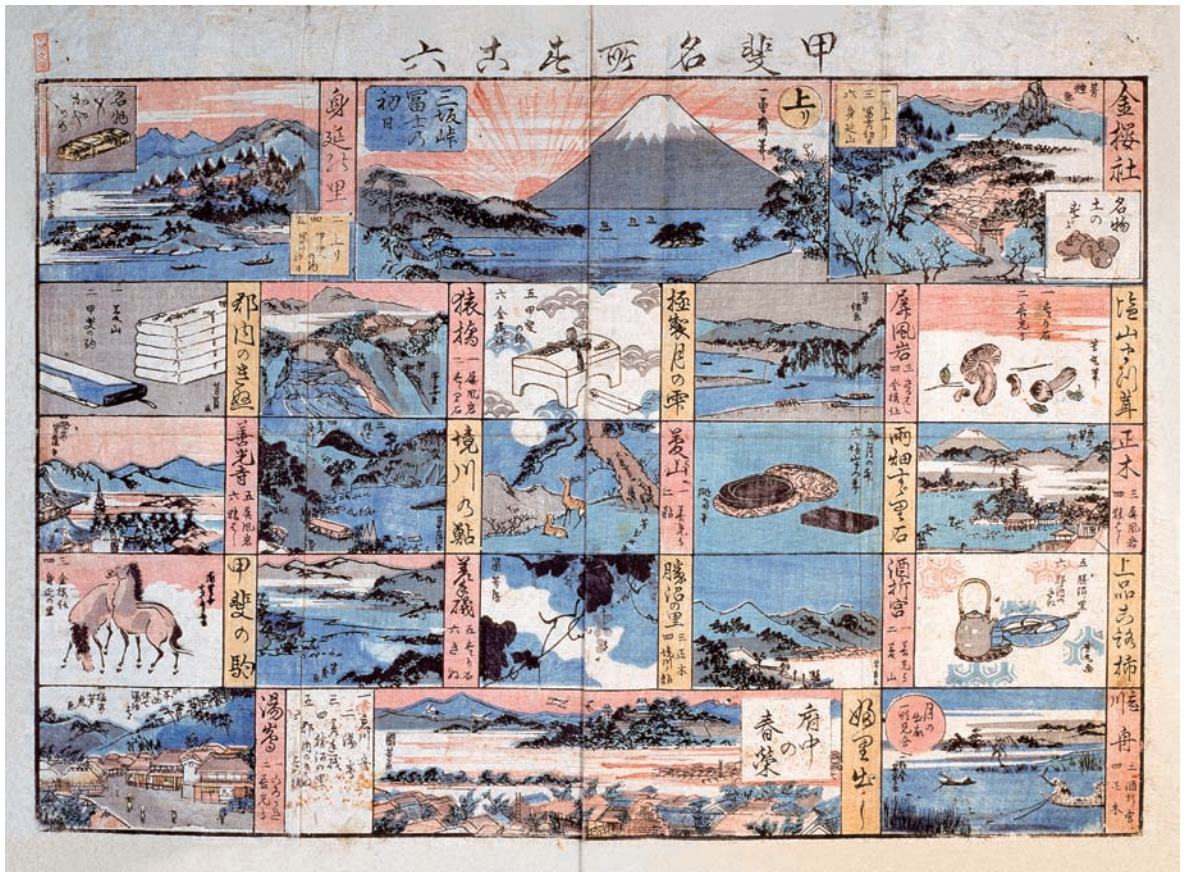
温泉場の大衆化はさらに進み、温泉の効能も口づてに広がっていきました。そんな中で町中の湯場は庶民の日々の楽しみ場になっていったのです。明治以降、例えば深町（現在の甲府市城東）では、湯場が次々と開業。夏になると農作業を終えた人たちが湯で汗を流し、おすしを食べて映画を見に行くのを楽しみにしていたそうです。湯場の周りには屋台が出て、ころてんや、枇杷葉湯（枇杷の葉などを煎じたハーブティーのようなもの）などが売られていて、湯上り客が浴衣姿で世間話をしたり、将棋を指したりしていました。また、隣接する料理屋の2階広間では義太夫や笛・尺八を披露し合うなど、湯場は夏の庶民の楽しみ場として大層にぎわったようです。

このように温泉場の大衆化が進む一方で、県内の閑静な温泉郷は、太宰治ら文豪たちの創作意欲をかき立てる文化創造の場となっていました。山梨各地の温泉はそのひなびた風情や豊かな自然が文学と融合し多くの文豪に愛されたようです。

これからも温泉は人々を癒やし  
歴史を重ねていく

昭和36（1961）年には石和温泉が湧出しました。果樹園から噴き出した湯は近くの川に流れ込み、地元の人々に「青空温泉」として親しまれました。やがて、都心からのアクセスの良





甲斐名所古六(山梨県立博物館蔵) 幕末の甲州の名所や特産が分かる貴重な資料。左下に当時の湯村温泉が描かれている



昭和36年ごろ、「青空温泉」として親しまれていた石和温泉  
(『写真集 山梨百年』より)

さから高度経済成長の中で発展して歓楽街もにぎわいました。昭和の懐かしさが残るレトロな歓楽街は、今では石和温泉の味わいの一つとなっています。

山梨にはまだまだ個性的な温泉が数多くあり、その泉質や景色、地元ならではの味や人情に触れられる場となっています。湯けむりの向こうに広がる歴史ロマンを感じながら、湯の町の情緒に触れてみてはいかがでしょうか。